君の隣で眠りたい

本編から二年後の話です。

へたれヴィンはいません。

「いやぁ、これは面白いね」
「そうか」
「うん。プロットの段階で既に面白いと思っていたけど、期待以上だよ。リヴァイ・アッカーマン初めてのＳＦ小説、いい感じじゃない！」
初稿を提出してから初めての打ち合わせで、ハンジはえらい上機嫌だった。書き下ろしの新作の出来は彼女のお眼鏡にかなったらしい。
ＳＦ小説を書いてみないか、というとても漠然とした提案から始まり、ああでもないこうでもないと打ち合わせを重ねた末に出来上がったものなので、俺としても素直に嬉しい。
「そういえばさ」
「……あ？」
「最近、なんか文章が色っぽくなった気がするね」
思わずアイスティーを吹きそうになってむせた。
「……なんだ、そりゃあ」
「んー……、なんていうのかな。艶っぽさ、っていうの？　直接匂わせるようななことが書いてあるわけじゃないんだけど、言葉の端々に色気を感じるんだよねー。あ、もちろんいい意味でだよ。新しい恋人でもできたの？」
「いや、そういう訳じゃねぇけど……」
ふぅん、ま、いいけど。とハンジは曖昧に頷いた。
「作風に深みが出ていことだと思う。じゃ、校正あがったらまたよろしくね」
打ち合わせを終え、ハンジと別れて駅までの道を歩く。日差しは温かいが強い風のせいで少し肌寒いくらいだ。数日前までは満開だった遅咲きの桜も、昨日の強風を伴った雨のせいですっかり葉っぱだけになっていた。
ウェストポーチの中でスマートフォンが震える。取り出して画面を見れば、見慣れた名前が表示されていた。
「もしもし」
『おはよう、リヴァイ。これから行っていい？』
背後でがやがやと賑やかな音が聞こえる。どこかの駅だろうか。
「打ち合わせに来てたからまだ外だ。そうだな……一時間後なら」
『了解。じゃ、また後で……』
思わせぶりなトーンで電話が切れた。やれやれ、と溜息を吐いて歩調を早める。あいつが来る前には

やらなくちゃいけないことが色々あるのだ。主に、俺の都合だが。

×××

帰宅して掃除やらなにやらを終え、電話からきっちり一時間ほど経ったころ玄関のチャイムが鳴った。
「ただいま」
「おう」
にっこりと笑みを浮かべたエルヴィンの手には、駅前のケーキ屋と和菓子屋の袋がひとつずつ提げられている。
今やエルヴィンは家に上がるときに「お邪魔します」とは言わない。俺がいつまでも他人行儀なのもどうなんだ？　と言ったせいだが。
「打ち合わせ、どうだったの？」
「好評だった。細かい手直しとかはまたあるだろうが、大筋はあのままでよさそうだな」
「ね？　俺の言った通りだったでしょ。絶対面白いからって」
先ほど自分で買ってきたケーキにフォークを突き立てながら、エルヴィンが自慢げに言う。執筆中、本当に面白いのだろうかといまひとつ自信がなかったのだが、エルヴィンは絶対に面白い！　と迷う俺の背中を押してくれていた。
「そうだな。今回はお前に助けられた」
「またいつでも頼ってくれていいよ」
誇らしげに胸を張るエルヴィンだが、口元に付いたクリームのせいで色々台無しだ。
「あんまり調子に乗るなよ」
俺は薄焼きの煎餅をかじりながら隣に座るエルヴィンの頭を小突く。俺が甘い物が好きでないことを学習したエルヴィンは、最近こうやって遊びに来る際は甘くない物を買ってくるようになった。
大学に入学して以来、エルヴィンは大学近くのアパートで一人暮らしをしている。平日は講義とバイトに専念していて、遊びに来るのは週末限定だ。
「また子ども扱いする……俺、もうすぐ二十歳だよ」
エルヴィンが拗ねたように頬を膨らませる。そういうところが子どもっぽいんだがな、と思うが言わないでおく。
「いつまで経ってもお前が年下なのは変わらないからな。諦めろ」
体つきならもうすっかり大人の男と言えるエルヴ

ィンだが、俺にしてみればやはりまだ子どもと言う感覚が抜けきらない。これがあと十年もしたら変わるのかもしれないし、もしかしたら一生同じように感じるのかもしれない。
「ひどいな……でも、子どもじゃできないこと、してるよね？」
青い瞳が濡れたように光る。獲物を見つけた獣みたいにぎらついた目線が、俺は嫌いではない。
「そうだな……」
口元に残ったクリームを指ですくい取って舐める。途端に抱き寄せられて唇が重なる。エルヴィンは相変わらず目を見開いたままキスをするのは変わらないが、もう赤くなったり歯をぶつけたりするようなことはない。
「んっ……ふ、っ……」
口の中を厚みのある舌で残さずくすぐられながら、指で耳や首筋をさすられると背中がぞくぞくする。伸ばされた手がスラックスの隙間から潜り込んで、下着越しに尻を揉まれる。
「おい……『待て』はできるだろ？」
そのままソファの上に押し倒されそうになるのを制して立ち上がる。後片付けが面倒なのは嫌だ。

寝室に入るなりベッドの上に押し倒されて、Ｔシャツを首元までたくし上げられた。
「あっ……！」
いきなり乳首に吸い付かれて思わず声が上がる。右を吸われながら左は指先で捏ね回されて、腰の奥が疼く。ちゅうちゅうと音を立てて吸い上げたかと思えば大きく舌を動かしてぺろぺろと舐められ、あるいは尖らせた舌先でつつかれる。
「んんっ……あぁッ！」
きゅっと抓られると痛みと紙一重の刺激がびりっと背筋を駆け抜ける。胸元はすっかりべとべとで、濡れた乳首が空気に晒されてそれすらも感じた。
スラックスと下着を脱がされ、すっかり勃起したチンコがエルヴィンの視線に晒される。まるでよだれのように先走りを垂らしている先端をつつかれて身悶える。
「……リヴァイ、こっちは全然触ってないのに濡れてるよ？　おっぱい吸われただけなのにこんなになっちゃうんだ？　すごいえっちだね、お兄ちゃん」
子ども扱いしている意趣返しとばかりにエルヴィンがわざとらしく言う。初めの頃は顔を真っ赤にして俺にリードされるばかりだったくせに、今ではす

っかり主導権を握るようになったエルヴィンはどうも軽い嗜虐趣味の気がある気がする。俺はそんなエルヴィンにねちっこい言葉責めをされると余計に感じてしまうので、これが割れ鍋に綴じ蓋というやつだろうか。

「えっちなお兄ちゃんは、ここをいじられるともっといやらしくなっちゃうんだよね？」

「んあぁっ！」

ローションを塗り込めたアナルに、エルヴィンの指が潜り込んでくる。すぐに前立腺を探り当てて、執拗にそこを責めてくる。

「すごいえっちな顔してる……おしりの穴をいじられて気持ちよくなっちゃうなんて、変態だね？」

中を弄りながらまた乳首を吸われる。違う箇所から同時に与えられる快感に、頭が真っ白になりそうだ。エルヴィンの動きに合わせてひたすら喘ぐしかできない俺はさぞかし間抜けな顔をしているのだと思うけれど、自制が利かない。

「おっぱい吸われるとこっちがきゅって締まるんだね。わかる？　俺の指をこんなに締め付けてるよ。女の子みたいだね、可愛い」

興奮したエルヴィンはいつにも増して饒舌だ。羞恥を煽る言葉をぽんぽんと吐きながら、俺を追い詰めていく。

十分に広げられたアナルはもう指では物足りなくなっている。早く突っ込んで欲しい。俺が浅ましい欲求に逆らえなくなったのを見越して、エルヴィンが唐突に指を引き抜いた。

「あ……」

「リヴァイ、どうして欲しい？」

「挿れて……」

「何を？」

余裕ぶって、すっとぼける横っ面を今すぐ張り飛ばしたい。けれど実際の俺は羞恥に顔を赤くしながら屈辱的な言葉を紡いだ。

「お前のチンコ挿れて、気持ちよくしてくれ……」

「……よくできました。じゃぁ、えっちなおにいちゃんのいやらしい穴に、ちゃんと挿れてあげるね」

ようやく服を脱いだエルヴィンの勃起しきったチンコも我慢汁を垂れ流してる。最初は皮を被って初々しいピンク色をしていたそれも、今ではすっかりずる剥けで歴戦の強者ですとでも言いたげな色に変わっていた。ある意味、俺が育ててやったと言えるわけだが、直視するとなんだか気恥ずかしい。

ゴムを被せたぶっといそれが、ローションで濡れてひくつくアナルに押しつけられる。ずぷぷ……っと侵入してくる質量に、溜息が出る。
「あぁ……リヴァイ、ほんとえっちな顔してる。可愛い……」
うっとりとエルヴィンが呟く。
俺はどちらかと言えばバックから突かれる方が恥ずかしい顔を見られずに済むので好きなのだが、エルヴィンは俺の顔を見たがって正常位や騎乗位でしたがる。男の顔に可愛いもクソもないだろうと思う。
「ほら、根元まで全部入ったよ。リヴァイのえっちな穴は俺のチンコが大好きなんだね。すごいきゅうきゅう締め付けてくる」
腰を抱えてゆっくりと揺さぶられる。腹の奥がむずむずするような、もどかしい快感に自然と自分でも腰が動いてしまう。
「リヴァイ、勝手に腰が動いてるよ？　本当にえっちだなぁ……」
「んぅ……あ、あッ！」
速度を速め、ギリギリまで抜いては奥まで一気に突かれる。ぱんっ、ぱんっ、と肌のぶつかり合う音がやけに大きく聞こえる。
かと思うと今度は前立腺のあたりばかりをじっくりと擦られる。どんどん中の感覚が敏感になって、薄いゴム越しにエルヴィンの形がはっきりとわかる。ねっとりと中をかき回し、いいところを押しつける動きに翻弄されて息が乱れる。
「いやぁ……あ、あっ……」
腹の奥が痙攣するような感覚が自分の意思とは無関係に広がっていく。
「あぁ……リヴァイ、イッてる？　すごい締め付けてくる……俺もイキそう」
「あ、あぁっ、まだ、やっ……！」
無意識に逃げようとした体を押さえ込まれ、奥までずっぽりと貫かれて容赦なく揺さぶられる。馬鹿みたいに声が出るのを抑えられない。
「リヴァイ、可愛いよ、すごく可愛い……」
上擦った声で繰り返すエルヴィンの背中に必死でしがみついて、俺は際限のない快感に涙を流した。
「リヴァイ、いっぱい出すよ……！」
ぶるっと身震いしたエルヴィンのチンコが大きく脈打つのを感じながら、俺は汗で湿った背中に爪を立てた。

「結婚したら、家を買いたいんだよね」
「……あぁ？」
寝言みたいなエルヴィンの言葉に、俺は閉じかけていたまぶたをのろのろと上げた。
一週間我慢していたエルヴィンがたったの一回で満足するわけもなく即座に二回戦を挑まれ、ついでに風呂では生でハメられた俺はすっかり消耗しきっていた。
「この家に住めばいいだろ」
「だって……お母さん、いつか帰ってくるかもしれないだろう？　それに……なんていうか、男の甲斐性とでも言うのかな。自分の稼ぎで手に入れたい、っていうか」
「ふぅん……」
正直なところ、俺としてはエルヴィンのこだわりには共感しかねるのだが、本人としてはやはり年下なのを気にしてのことなのかもしれない。
「お前がそう言うなら、それでいいけど」
「うん。もちろん当分先になるだろうけど……リヴァイのための書斎は欲しいよね。それから、風呂は一緒に入っても窮屈にならない大きさで……あ、あとベッドは丈夫なのがいいな。毎日セックスしても平気なぐらい」
ぎょっとしてベッドの上に跳ね起きる。
「……おい、最後のはなんだ。ふざけんな！」
「えぇ……だめ？」
「当たり前だろ、俺の身体が持たない」
童貞らしい早漏を克服したエルヴィンははっきり言って精力旺盛すぎる。俺の方が先に何度もイかされるので終えたあとはいつもくたくたになるのだ。
「じゃぁ……週五は？」
「それでも多すぎる」
「……じゃぁ、週三で」
「そこは追々、実情を鑑みて変更だ」
どうせ、ねだられれば強くは言えない未来が目に浮かぶ。けれどそれは黙っておくことにした。
「……早く、毎日リヴァイの隣で眠れるようになりたいな」
甘えるように身を寄せたエルヴィンが呟く。
「まずはあと二年頑張らないとな」
「うん」
「待ってるから、早く迎えにこいよ」
俺の将来の伴侶は、なかなかに前途有望だ。

「君の隣で眠りたい」

2016.05.04

七色硝子/氷月涼

Pixiv=134555

twitter=selky13